市立函館博物館
友の会々報　No.61

私のルーツ探訪

会員　駒井麗子

1．ルーツ探しのきっかけ

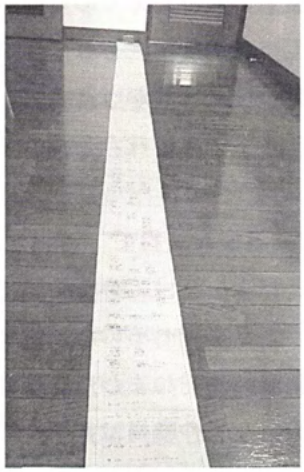
(1) 井原家系図との出会い

そもそも私が、自分のルーツに関心を持ち始めたきっかけは、井原家の系図を見たことにあります。今私の手元に、その井原家の系図のコピーがあります。井原家とは、私の母方の祖母の実家で㊥くつわ印福島屋の二代目・杉浦嘉七の縁に連なります。この杉浦嘉七とは、箱館の経済界で最も傑出した存在ともいわれ、産物会所の元締や御用達等を務め、北海道一の大富豪にのし上がった人物といわれた人でした。

その系図の持主は井原秀哉といい、母の従弟にあたる人です。彼は戦前に仕事で樺太の大泊に勤務していましたが、終戦後に秀哉の叔母である私の母方の祖母の家に引き揚げてきました。彼は井原家の先祖の系図を大切に持っていたのです。当時女学生だった私に「いいものを見せて上げましょう。」といって、一巻の巻物を取り出し座敷に広げました。それは幅二十数センチメートル長さ四メートルもあるものでした。

それは、第五十一代・平城天皇を祖とする大江家の系図で、平安前期の中古三十六歌仙の歌人といわれる大江千里（おおえのちさと）や鎌倉幕府の基礎を作ったといわれる大江広元（おおえのひろもと）等の名前がみえ、他にも文章博士（もんじょうはかせ）や入唐僧（にっとうそう）の名前や官位等が詳しく記されていました。井原家の祖先は大江広元の四男で海東判官・忠成から始まっていました。

写真－1　会場（五島軒）での発表者



写真－2　井原家系図のコピー

コピーが未だ一般的でなかった頃でしたので、なんとか二部複写しましたが読みにくい字もあって理解す

るには不十分でした。その後、叔父が何部かコピーして甥や姪に配ったので、私も手に入れる事が出来ました。

昭和55年頃、世間ではアメリカに始まる「ルーツ探し」がブームとなり、日本でも流行しました。私もガゼン波に乗ってしまい、娘の話によると「サァー私も始めよう」と系図を横に置いて、セッセと調べていたそうです。

(2) 井上能孝先生との出会い

昭和も終わり頃のことでした。先祖に幕末通詞を持つという方が御近所におられ、その方から井上能孝先生の著書『箱館英学ことはじめ』(北海道新聞社、1978年）という本を熱心に薦められました。この本を読み進むうちに、何と祖母の祖父であり、二代目・杉浦嘉七の異母弟であった井原兵五郎（いはらひょうごろう）の名前が目に止り、大変驚きました。それは明治４～５年頃の裁判沙汰になった問題でしたので、あまり自慢出来る事ではありませんが、そのようなこともあって本格的に調べてみようと思い立ったのでした。

『箱館英学ことはじめ』を読んだというだけで一面識もなかった井上先生でしたが、ご自宅へお訪ねして事情をお話ししたところ、古文書の解読文や目録等を親切に御教示頂きました。大感激致しました。

井原兵五郎が福島屋の商売で、船が沈没して破産した事や、杉浦嘉七と異母兄弟であった事などは祖母から聞いて知っていましたが、あとになってそれ以上の事情をもっと詳しく聞けなかったことがとても残念に思われます。

(3) 函館市史編纂室を訪ねて

この先もっと調査を続けていくには、資料が残っている杉浦嘉七のことを調べるのが近道と考えて、市役所の「市史編纂室」を訪ねました。それは勇気のいる事でした。対面した男性職員は井原兵五郎の名を聞くと、開口一番に「あー、トラブルメーカーね…」と言いました。私はガックリきましたが、のちにそれは仕方の無い事でもあったのかと、納得することとしました。

中央図書館ではなく市史編纂室へ行ったのは、編纂室発行の『地域史研究はこだて』を創刊号から読んでいたからで、こちらの方がより多くの事実を知ることが出来ると考えたからです。何度かお邪魔して、編纂室の方々にはいろいろと資料のコピーを頂いたり、解読の判らぬところを教えて頂いたり、とても親切にして頂きました。

私のルーツ探しもいよいよ軌道に乗り始めてきました。

2．ルーツ探しへの旅へ

(1) はじめての旅（平成５年１月）

井原家の出身地である和歌山県日高郡中津村（現在は合併して日高川町となる）へは、平成５年から同19年迄、五度訪ねています。

平成５年１月に、母と京都の西本願寺へお参りする事になり出かけました。一日だけ母から自由時間を貰い、一人で初めて中津村への日帰りで出かけました。紀勢線の御坊駅からハイヤーで、日高川添いの一本道を山の中の中津村へ向かいました。幸運にも運転手は親切な方で、私を連絡も取らずに御坊市の郷土史家熊代佐市先生のお宅へ連れて行って下さいました。私は気が付きませんでしたが、無線で郷土史家を探してくれていたのです。先生もまた初対面の私をどうぞと二階へ揚げて下さり、中津村のこと等を親切にご説明され、運転手と一緒にお話を聞きました。

それはコピーでも「井原家系図」を持って行ったからだと思います。後で知った事ですが、先生は『中津

写真－３　和歌山県日高郡中津村の遠景

村史』の編纂専門委員でした。運転手はよほど歴史好きだったとみえ系図にあった兵五郎の父親の出身だったという「和泉屋」へ連れて行ってくれましたが、御主人はお留守のようで、すぐに失礼しました。

その日は朝一番に京都を出て、帰りは京都直通の最終便で帰りました。この時は、兵五郎については何の手がかりも得られませんでした。しかし、中津村の井原家はそれなりの格式もあった様で、一族についてのいろいろなお話を聞く事が出来ました。後々熊代先生には何度かお目にかかり、その度にたくさんの情報を教えて頂きました。

(2) 二度目の訪問（平成７年１月）

平成７年１月に親戚の結婚式が名古屋であり、式の前日に熱田神宮を訪ねました。先祖である大江忠成が熱田神宮に関わりがあると系図で分かっていましたので、社務所で系図を見せながらお話を伺いましたところ、「熱田大宮司千秋系図」と書かれた部分をコピーして下さいました。大織冠藤原鎌足－不比等に続く系図でした。忠成の添書は大宮司刑部権少輔の猶子とあり、実父は大江広元で次の代も大江氏の猶子でした。

翌日の式後に一人で、大阪経由で中津村へ向いました。その当時、ＮＨＫでは大河ドラマで「八代将軍吉宗」を放映中でしたが、中津村では、吉宗の井原家からの出自説で湧き返っていました。熊代先生とは事前に連絡をとっていましたので、中津村の隣美山村の井原総本家へ案内して頂きましたが、御当主は専ら吉宗の出自について熱心なお話し振りでした。井原西鶴についても力説されていました。お座敷の一隅には徳川家に関する分厚い本が何冊も並んでいて、その気合の入りようが窺えました。地元での井原家の情報についてはおおよその見当がつきましたので、まずまずの旅となりました。

帰途京都の東本願寺向かいのお寺関係の宿へ泊まりました。翌１月17日の明け方、あの「阪神大震災」でした。泊り客は驚いて、皆廊下へ飛び出しました。私はすぐに、東本願寺へ行ってみました。大きな鉄の扉がゆがんだ状態で傾いていました。朝のお勤めが聞こえたので中に入ってみましたが、漆喰の壁の白い粉が少し散らばっている程度で済んでいました。一般の人が三・四人いたように記憶していますが、私も後の方で手を合わせました。

帰りの交通機関は大混乱で、名古屋からの飛行機に乗れなくなり、京都駅から奈良線で南下後はよく判らないままに、名古屋からは新幹線で東京へ、そして盛岡では夜遅くまで寒い駅待合室で過ごし、やっとの思いで函館へ帰ってくることが出来ました。

帰宅後に、月忌参りのお坊さんに「函館の檀家では私が一番乗りですね…」と自慢しました。

(3) 田島教授との出会い

同じ平成７年の６月23日から、札幌市内で神奈川大学のフォーラムが開催されました。新聞には講師に神奈川大学経済学部・網野教授と同大学短期大学部・田島教授の講演と書かれていました。内容に関心があったので、札幌在住の娘に講演の資料を送ってもらいました。田島教授の「近世北方世界の商人と漁業」についての資料の印刷が不鮮明でしたので、教授に直接お聞き出来たらと思っていました。

その何日か後に、田島教授から直接電話を頂き、大いに驚きました。教授は杉浦嘉七の調査で中津村へお出かけになったそうですが、役場ではよく分らず、ただ「函館の駒井さんに連絡を取っては…」と言われたそうです。教授は当時乙部町史の編纂にかかわっておられて、札幌でのフォーラムの後に乙部に向かわれ、そこからお電話を下さったようでした。

その後も二三度お目にかかり、いろいろ御教示を頂きました。最近も来函された教授にお目にかかる機会があり、お話を伺う事が出来ました。

(4)『中津村史』の発行

平成８年に中津村の『中津村史・通史編』が発刊されました。それに先だつ５～６年前には、『同・資料編、上・下巻』が発刊されていましたので、併せて三冊まとめて送って頂きました。驚いた事に、通史編の後付に「高津尾観音縁起」が掲載されていて、「願主全啓筆」とありました。全啓とは兵五郎の祖父なのです。御先祖の筆跡を見ながら「今日のこの日のためのルーツ探

写真－４　『中津村史』資料編と通史編

しだったのではないか」と、言い知れぬ感動を覚えました。この三冊の『中津村史』によって沢山のことを知る事が出来たのです。

(5) 三度目の訪問（平成９年８月）

平成９年に従姉達と三人で、中津村を訪ねました。観音堂にお参りをしたあと、境内の全啓のお墓にも花を手向ました。昭和28年の台風水害で井原総本家の屋敷は流されて、その跡は井原公園になっており、井原西鶴資料館もありました。

その水害の時に、吉宗出自説の証となる品々も流されてしまったそうです。その後、役場の大前さんと云う方と文通して、二通りある井原家の系図のことなどいろいろお聞きし、私の手元にある系図では知り得なかったこと等が分り、納得出来たことがたくさんありました。

写真－５　観音堂にある全啓の墓

(6) 四度目の訪問（平成11年８月）

平成11年８月４日に、一人で中津村へ出かけました。中津村へ泊りましたが、その夜に高津尾観音堂で「百万遍」の行事がありお誘いがあったので、私も出向き数珠を廻しました。地元の老女達が14～15人も集ったでしょうか、昔は子供達も沢山集って来て、お餅やお菓子を用意してそれは賑やかだったそうです。観音様の御開帳は年に一度で、そのお姿も拝観することが出来ました。熊代佐市先生は病気のため入院中で、お目にかかれず残念でした。

帰りに御坊市の歴史民俗資料館へ立ち寄りました。近くに岩内一号墳があり、これは皇子塚古墳ともいわれ、有馬皇子の墳墓ともいわれているそうです。有馬皇子が道すがら詠まれたという和歌「家にあれば　笥に盛る飯を　草まくら　旅にしあれば　椎の葉に盛る」は、万葉集の中でもよく知られた歌でしたがお墓がこの御坊市だったとは、知らなかったので驚きでした。

飛鳥時代の武将で、東北鎮圧に出かけた阿部比羅夫は、有馬皇子の母の実家で、有馬皇子の強力な後ろ盾でしたが、皇子が非業の死を迎えたこの時期は、百八十艘の船を持って北国蝦夷征討に派遣されていました。有馬皇子を罠にかけるためには阿部比羅夫が邪魔だったため、北へ派遣されたとする説もあるそうです。

この時は、御坊市内で最初の旅で立寄った和泉屋さんのお宅へ寄り、御主人にもお目にかかりました。前もって連絡をとっておきましたので、御先祖が残された文書の一端を出して来られましたが、あちこち虫に喰われて一枚めくる度にパラパラと粉が崩れ落ちるようでした。少しの時間でしたので、古文書の内容は何が何やら判りませんでしたが、この地では有名な廻船問屋だったので古文書類は相当ある筈といわれていました。やはりここに訪ねられた事のある田島教授は「あのまま古文書が消えてしまうのは惜しいですね」と仰っていました。

あとは一人で栖原屋の出身地である湯浅へまわり、漁港へ行って見ました。二百年ほど昔井原の先祖が、この浜から栖原屋の船に乗って、北前航路か大畑まわりではるばる松前へ来たのかと、感慨深く遠くの島影を見ながら潮風に吹かれていました。

写真－6　和歌山県湯浅町の漁港

(7) 五度目の訪問（平成19年）

平成19年に大坂で結婚式があり、その後一人で中津村へ行きました。途中和歌山市の図書館に寄り、井原に関する箇所のコピーを取りました。それで、兵五郎の父の事や兄の事を知りました。

翌朝には中津村へ出かけましたが、特に調べる事があるわけでもなく、ただ高津尾観音堂の状態がどうなっているかが気がかりでした。観音堂の周辺は訪れるたびに少しずつ変っています。はじめの頃は綺麗に垣根があったのに、今は垣根もなくなり裏側の道路は舗装され、バイクが走り廻っていました。道路のハネがお堂に飛散っているようで、何か雑然とした様子です。境内の全啓の墓も、今はどうなっているかと思われます。何しろ墓の主について、知る人も居なくなったようですから。

写真－7　高津尾観音堂

以上が私のルーツ探しの旅の概要です。その都度コピーをとったり、情報をもらったりして、少しずつではありますが函館に居ては分らなかったことがだんだんと分って来ました。

幕末から明治にかけての、井原家親子三代の全体像もおぼろげながら見えて来ましたし、あとはその情報を年代に添って明らかにして行くだけです。

3．井原家の歴史

(1) 井原家について

井原家の先祖は「大江家」です。四位～五位の位階を持つ中級の公家で、その昔は牛車で内裏に参内していた家柄であったと聞きます。

建久３（1192）年に源頼朝が鎌倉に幕府を開きいたとき、大江広元を政所長官として鎌倉に招いたといわれています。この広元の四男忠成は、駿河富士川の右岸にある庵原郡に領地を与えられ、以来地名の庵原より「井原」姓に改姓したといいます。南北朝の動乱で井原氏は足利氏に属して上洛しましたが、足利氏が敗走後に南朝方に組みし、紀州日高郡塩屋城主となりました。

『紀伊続風土記』に「北塩屋村の東にあり鍋倉井原左エ門の城といふ…」と記され『御坊市史通史編Ⅱ』には「井原家系図の武任・国時・康時のころ塩屋城主…」との記載がある。塩屋城がどこにあったか明らかではないが、先述の『風土記』では「…鍋倉井原の「井原」が井原氏を指すのであれば塩屋城は塩屋の城の意で当鍋倉山城の事であろう…」と述べています。

熊代佐市先生の著作である「八代将軍徳川吉宗中津村出自説」(熊代佐市著、中津村教育委員会、平成８年)には「井原氏は天正５（1577）年織田信長の紀州来攻を機会に戦乱の世に愛想をつかし三十木（みそぎ）村に逼塞しました。浅野幸長が藩主の時代には日高奥第一の豪農となり徳川時代に中山中組の大庄屋となり郷土開発に業績をあげ井原西鶴や徳川吉宗を生む名門となりました。」と書かれていました。

(2) 初代井原忠三郎（種伸・全啓）のこと

中津村の井原家の家紋は「舞鶴（まいづる）」です。兵五郎の家

紋は「立沢瀉」で、函館の井原家の墓にも立沢瀉が刻まれていました。

『中津村史・資料上』の「若者入用并人数覚帳（寛政３年亥８月）」の中に「忠三郎・忠三郎子忠吉」の名前がみえます。この時期に、忠三郎が中津村に居住していたことを示す唯一の記録です。この忠三郎は、井原兵五郎の祖父に当る人物です。忠三郎（種伸・全啓）は、寛政元年から５年まで栖原屋の二代目・松前支配人を務めていました。

栖原屋角兵衛とは紀伊国有田郡栖原村に住居し、初代は元和末年に上総国へ渡航し舘山浜萩等に漁業を試み、同国天羽郡萩生村に転じて漁場を開拓後、江戸鉄砲州で炭木材屋を営業しました。のちに南部大畑に支店を設けて木材を江戸大坂に販売し、五代目の頃の明和２（1765）年に北海道松前に支店を置いて、北海物産の輸送販売を営業していたといいます。その後松前藩の場所請負人となり、千島樺太漁業に大いに活躍しました。郷里の村名「栖原」をもって家号としたと、資料にあります。

『御坊市史・第四巻・資料編Ⅱ』には「忠三郎（全啓）養父義は有田郡須原村角兵衛江戸出店にて久しく相勤め候由に付、少々譲金も之有…」との記述があります。これによれば、忠三郎は松前支配人のみならず、江戸でも勤務していた事になります。

山深い中津村の住人が、遠く離れた栖原屋とどの様ないきさつから関係が生れたのでしょうか。想像するに、日高川は昔から村々の生産物の流通ルートになっていたようです。

山方の厳しい環境の中から作られた諸産物は、炭、材木その他、雁皮、棕櫚、皮、軸竹、椿の実、渋、密、傘柄竹、茶、黄柏、烟筆、肉桂等があり、村は賑っていたと思われます。代々庄屋の家柄であれば、少なくとも和歌山城下までの情報は入っていたと思われますし、商人との交流もあったものと察せられます。山間の限られた土地での百姓では限度があると考え、商人への道を歩んだのでしょうか。

(3) 高津尾の軸屋

『中津村史通史編』に「高津尾の軸屋」という記述があります。「古代から近世末期まで文房具の主流は筆墨だった。特に町人文化の元禄期にはその需要が飛躍的に増大し、大坂の市場で膨大な取引が行われたと考えられる。既に元禄12年三十木村の井原平治兵衛が大庄屋江川平助から筆軸の買付許可を受け、後に郡奉行から七組大庄屋にこの事を通達している。平治兵衛の兄正治は高津尾に分家し、その子平治は大坂の板屋橋で軸屋を開いた。それ以前に大坂にあって、文筆に名高い井原西鶴が手引きをしたのやもしれず…」と書かれています。

現在高津尾本郷にある忠三郎本家筋の井原睦雄家では、今も「軸屋」の屋号で知られています。私が高津尾に行った時は、間口四間ほどの商家風の構えの睦雄家でしたが、その家には老母がお一人で住んで居られるそうです。どこも同じで、若い人達は大体が都会へ出て行ってしまうのです。軒下の「軸屋」の看板がその存在を示すのみでした。その軸屋の向いの一段高い位置に高津尾の観音堂がひっそりと建っていました。

写真－８　中津村にある屋号「軸屋」の井原本家

(4) 高津尾観音堂の略縁起

井原忠三郎（全啓）の「観音堂建立勧化帳趣意書（略縁起）（享和４（1804）年春正月）」は木版刷りで同様のものが六冊保存されており、それぞれに寄進者名と金額が記されています。一度見せて頂きました。略縁起のはじめには次の様に書かれています。「十一面観音は恵心僧都の作で、近江国の尼僧が一宇を建立してこの像を祀り、近江堂と称した。天文の頃（1532～55年）火災に遭ったが霊験により焼けなかった。そ

写真－９　高津尾観音堂の「略縁起」

の後当地に移された云々…」とあります。勧化帳には和泉屋喜太夫を筆頭に八十四名の寄進者の名があり金額も書かれていますが、筆頭の和泉屋は他を抜きん出た寄進者であり、忠三郎との関係の深さを物語っています。お堂の完成は文化３（1806）年で、足かけ二年の歳月を要したことが分ります。

忠三郎が観音堂の再建を思い立ったのはどの様な動機からだったのでしょうか。忠三郎が観音堂の完成の翌年に亡くなっていることから、病にでもおかされていて心を動かされる何かがあったのでしょうか。今はただ、あれこれと思い巡らすばかりです。

しかし観音堂の完成を見る事が出来た忠三郎は、大いなる喜びであったろうと思います。境内には文化４年１月２日に歿した忠三郎（全啓）の墓があり、小さな墓も何基か並んでありました。娘の喜世が婿養子を迎えたのもこの頃です。

婿養子の文啓は、薗浦新町和泉屋久兵衛の息男です。前述の田島教授がその辺の事情を御坊市でお調べになっていますが確実な事は掴めず、ただ和泉屋の分家筋であろうという事の様でした。

その和泉屋とは、代々３艘以上の大船を所有し、繁栄期の安永８（1777）年には日高廻船の船数が52艘でしたが、そのうち６艘は和泉屋の所有でした。天保年間（1840年頃）海難が続発して肥料問屋に転業しましたが、その後ろうそく問屋業者にも名を連ねています。『御坊市史』に「日高大回船用留」がありますが、それは和泉屋文書で、寛政７・８年の「正月嘉例之惣寄合（しょうがつかれい の そうよりあい）」に久兵衛の名があります。これが和泉屋久兵衛だと思います。

和泉屋薗家には二度お訪ねしていますが、土間は広くその先に御主人と帳場使用人が立ち働いていたと思われる大広間が二部屋続いていました。明り窓は小さく、ひっそりとしていました。中津村でも御坊市でも、和泉屋といえばすぐ通じたのは、往時の栄華を物語るものだろうと思われます。

(5) 二代目・井原忠三郎（文啓）のこと

婿養子の文啓もまた、忠三郎を名乗りました。二代目・井原忠三郎といえます。『松前町史』から二代目・忠三郎も栖原屋に勤めていることが分かります。『松前町史・資料編・第三巻』の「伊達家文書・日記（抄）」文政５（1822）年閏正月８日の項に「松前より江戸へ相越し候者へ、恐悦為る御酒を下さり候人数」の中に忠三郎の名がみえます。同じく正月十一日付けの「下谷御座敷より御召しに付、列座」にも「栖原忠三郎」の名があります。この当時、栖原屋は松前様にとって一目置かれた存在だったのでしょう。

文政７年申10月の「日記五・12月２日付・林右衛門着け届け並びに献上」には筆頭の御隠居様へ「大塩引拾尺生鯉弐疋（にひき）献上」と書かれています。献上品は上位から下位へ向けて塩引の大きさが三尺、弐尺、壱尺となっていくのがなんともおかしみを覚えます。栖原屋忠三郎殿も塩引壱尺宛と書かれていますから、一応頂ける位置にいたことが分ります。

この頃の忠三郎は46歳ぐらいでした。栖原屋の松前支配人は、五代目の北隅茂八の時代です。この時分には二代目杉浦嘉七となる孝吉は、すでに松前で生を受けていました。

二代目・忠三郎の文啓は、婿養子に入って井原家の一員となり、初代・忠三郎のあとを継いで栖原屋に勤め出したのか、それ以前から栖原屋と何らかの関係があってその縁で養子に入ったのか分っていません。いずれにせよ一年のうち大半は松前で、時には店の仕事で江戸へ出向き、そして薗浦の留守宅にも帰るという生活で、松前城下と薗浦に二つの家庭があったことになります。

この様な事は少し以前には、余り抵抗なく聞こえていました。私の身の周りでも明治の初め頃には国許に家族を残し、そして函館でも別の家庭を持っていて、本妻でもなく妾でもないという関係で暮していました。この様な話しはあちこちで聞かれていました。今では考えられませんが、箱館から函館へと変遷していく過程で多くの人々が北海道に渡り、様々な分野で活躍し、その生活の有り様にも少なからず影響を与えた結果なのでしょうか。

文政９年（1825）に妻・喜世が他界し、二代目・忠三郎は地士財産を相続しました。福山で生まれた孝吉は16歳になっていましたから、当然栖原屋の松前店に奉公し商売に励んでいた事でしょう。後々支配人となり、福島屋・初代の杉浦嘉七に見込まれて、福島屋に迎えられたのも、幕末期の箱館港でその手腕を存分に発揮出来たのも、みなこの頃からの積み重ねがあったからでありました。

(6)『御坊市史』の記録から

二代目・忠三郎の薗浦での様子を知る文書もあります。『御坊市史』、「天田組大庄屋御用留」の天保３年の項に「薗浦・井原忠三郎、蜂蜜買集の義に付云々…」とあります。それによると忠三郎宅には「御役を相記し候提灯を所持し、手先の者の宅にも提灯並びに相記した札を所持していて、提灯表には「御用」裏に「密方」と記してあり…」となっています。栖原屋が紀州藩の後ろ楯で順調に事業を展開していたともいわれていたことから、栖原屋に関わりを持つ忠三郎もその一端を担っていたのでしょうか。

また文面には「此の頃御城下湊北野町に借宅、手代躰の者を使っているようで、家族も引っ越してきている様子。薗浦自宅より倅が城下へ来たりもしている」とある事から、城下に店を構え、薗浦には自宅があったことが分ります。しかし薗浦では「家業は計り兼ねる」と書かれた文書もあります。それは当然のことでしょう、一年のうち何ヶ月も家を明け和歌山城下に店がある状態では、自宅は用事ある時のみの在宅ですから、薗浦にいる周囲の人達が不審に思うのも無理からぬ事でした。

「天田組御用留」には興味深い個所があります。天保５年の項に「薗浦地士、井原平之右衛門の倅、次郎兵衛は兼て身持が宜しからず候に付き、親並びに親類共より義絶を願い出候…」とあります。その頃薗浦の地士といえば、井原では忠三郎だけのようです。系図では分かりませんでしたが、忠三郎は文啓であり、平之右衛門なのです。その上長男は次郎兵衛と系図に記されています。

その翌年の天保６（1835）年７月14日に忠三郎が亡くなった時、長男が相続せずまだ十代であった兵五郎が相続したのです。また系図の上でも兵五郎の兄姉については添書があるのに、彼には何もなく前から不思議に思っていたので、この文面で疑問がとけました。松前の孝吉は三男ではありますが、喜世の子供ではないことから四男の兵五郎が相続する事になったのでしょう。孝吉は和歌山の薗浦には、一度も足を向けたことはなかったと思います。

同じ年の８月29日に兄・寅之助が26歳で亡くなりした。この時兵五郎は、まだ十四歳でした。天保６年11月に地士と家名を相続したと系図には書かれています。

地士とは紀州藩の制度で、農村に住み一般農民を支配しながら、平時は家臣団として活躍しなければならない義務を持っています。対外的にも紀州藩士の格式を備え、公式の行事にはすべて藩士と同様の待遇を受けるといいます。

４．井原兵五郎のこと

(1) 和歌山での兵五郎

いよいよ兵五郎（ひょうごろう）のことです。

兵五郎が北海道に渡る前の記録としては、唯一地士名簿に氏名が記載されていることです。地士・栗本氏の記録から、兵五郎が地士としての役割を果たしていたことが分ります。地士・栗本氏が残した天保10（1839）年正月からの「調用留」に、地士としての兵五郎を見ることが出来ます。まず天田組大庄屋瀬戸又次郎が自分の支配する者たちの名前を列挙し回覧した文書に、地士・井原兵五郎の名が出て来ます。当時18歳でした。

回覧文面の一例として、「役儀の出精を相勤め、住人

へ厚く救合をもって取り計らい候段、御代官達への品も之れ有り、奇特成る儀に付、代々年頭御目見の節は、熨斗目着用に成られるを御免」また「尾州様御逝去に付、今日より普請は三日、鳴もの七日停止」などとあります。

お城からの御触れを自分の支配下の地士へ回覧していました。「弘化5（1848）年3月4日午上刻、井原氏遣ス」で和歌山での消息は此処で終わっていました。

(2) 兵五郎の渡道

『御坊市史　第一巻　通史編Ⅰ』に幕末の薗浦での地士は2名で、鈴木左兵衛と井原鹿次郎の両名となっています。地士株は近世になって売買・譲渡が許されていたことから、兵五郎の地士株は井原家の親戚筋へ譲渡したものと思われます。このことから、兵五郎が北海道に渡った時期は、地士・栗本氏の記録が止まった弘化5年以降と考えられます。

嘉永5（1852）年に兄孝吉は福島屋二代目を襲名して杉浦嘉七を名乗り、箱館にいました。嘉永4年に兵五郎の長男、利三郎が出生しています。利三郎の烏帽子親は金沢弥惣兵衛で、彼は福島屋の番頭格の人です。兵五郎がどの様ないきさつで箱館にやって来たのか分りません。兄嘉七が名実ともに福島屋の実権を握ったことから、肉親の必要を感じて兵五郎を呼び寄せたものか（後に、これを窺わせる文書がありました）、又は身内の縁に薄い兵五郎が登り坂の兄の元へやって来たのか、何れにしても安政元年には売捌人として箱館に姿を現していました。 渡道の時期は嘉永2（1849）年から嘉永6（1853）年の間と考えられます。

安政3（1856）年4月に、箱館産物会所・福島屋嘉七の代人として産物引合いのため、大坂へ足かけ三年の出張に出ています。「福島屋諸産物諸用留壱番」に大阪での取引状況が分る文書があります。それによると大坂での首尾は甚だ芳しからず、事々に兵五郎の不行届・兵五郎の田舎者と、良いところ無しに読み取れます。嘉七が兵五郎を代人にするにあたって彼に商売人の力があると考えたのか、又は関西育ちの彼に大坂には親類縁者も居て、仕事を順調に進められると思ったものか、その判断はともかくとして、嘉七は代人として大坂に上らせたのです。

私が思うに兵五郎は5～6歳で母を亡くし、父は不在勝ちでした。父亡きあとに地士の名跡を継ぎましたが、職務はさしたる苦労をせずとも勤められたようで、平穏無事のうちに過して来た様に思います。箱館に来た当初の兵五郎には商売人としての才覚がとても備わっていたとは思えません。ただ戸数183軒、人口717人余りの村に住んでいたとはいえ、親類縁者の中には大坂方面に出て広く商売をしていた者もいるようで、商売に関しては意外にもそれなりの見識を持っていたのかもしれません。

そんな兵五郎が、出船入船賑々しく青い目の外国人が街を闊歩していた箱館にやって来たのです。いろいろな意味で驚きの目を見張った事でしょう。代人にしたことは嘉七の見込み違いか、それとも小手調べのつもりだったのか、ともかくこの文書を見る限り、何とも頼りにならない兵五郎と誰しもがみることでしょう。

仕事も終わり、大坂からの帰りに青森の御用達・伊藤家へ立ち寄りました。その時の様子を『青森市史資料編一』の「伊東家文書」から知ることが出来ます。次のような文面があります

「箱館御用達の福島屋嘉七殿の弟兵五郎が、大坂の箱館産物会所の御用にて、一昨年より出張していたが、本日こちらに帰着し、八戸屋に宿入りしている。いろいろお土産を頂き、八戸屋に参りこちらからも弘前（津軽）塗りの提げ重を一組進呈した。本来であれば一席設けたいが、年末の「みそか」が迫って取り込んでいるため、省略させて頂いて、右の品を遣わした。」とあります。

この文面から安政3年4月に大坂に上り、安政5年師走の年の瀬迫る雪の箱館へ帰って来たことが分ります。兵五郎は、さぞ安堵の胸をなでおろした事でしょう。兵五郎にとってこの足かけ3年の大阪出張は得るものが多く、その後の自信にも繋がるものとなったのではないかと思います。

(3) 箱館での活躍

箱館での兵五郎の活躍を示す文書類に、三つの文書があります。最初の文書は、安政7年2月19日の「御

触書写」で、この中には「椎茸栽培を奨励し、大豆も同じく値段も良く買上げるので、産物会所へ納める様、これについては売捌人大町兵五郎手の者が村を廻る云々…」とあって「売込人頭」として運上所向かいにあった「捌所」で盛んに交易に従事したようです。それを裏付ける資料として「問屋取扱文久三年買上移出産物表」があります。

第22表　問屋取扱文久3年買上・移出産物

屋号	問屋名	買上産物				移出産物		
		買上箱所数	魚肥物	その他	計	魚肥物	その他	計
ロ	浜田屋兵右衛門	6	石 14,715	石 132	石 14,847	石 21,730	石	石 21,730
ト	若狭屋宗太郎	2	1,380	410	1,790	3,620		3,620
ホ	秋田屋喜左衛門	3	13,077	308	13,385	8,044	102	8,146
ヘ	和賀屋宇右衛門	5	5,728	1,188	6,916	27,878＋2,800	38	27,916
ム	魚谷武兵衛	2	18,240	7	18,247	29,629　＋290	48	29,677　＋290
ル	大津屋茂吉	3	25,273	23	25,296	9,463＋　440	304	9,767＋　440
ヲ	津軽兵五郎					3,470＋15,040	150	3,620＋15,040
ワ	保崎屋平兵衛					175,749＋6,025＋160	27	175,776＋6,025＋160
	計　8　名		79,448	1,033	80,481	279,583＋24,305＋450	669	280,252＋15,480＋450

「元治元申子年問屋諸用留」（函館図書館蔵）より抜粋。以下4枚5入。
その他は鹿皮・鹿角・硫黄・木材等。

写真－10　「問屋取扱文久三年買上移出産物表」（写）

二番目に、慶応２（1866）年に青森へ向けて陶器類の売捌方を願い出た文書があります。内容は「この品物の売捌き方について心配していますが、御当所に置いて何分この品物を取り上げてもらえないため、甚だ難渋しております。従って、これ以上のお願いも恐れ多いのですが、津軽・青森においても望む人もあり、同所へ差し送りたいと考えております。御当所の湊の積み出し免許を頂きたくお願い致します。また、沖之口番所にもお届け致しますので、なにとぞよろしく御沙汰ください。」とあります。

この文書の写は産物掛より沖之口御掛中へ差出され、大略するとよろしく取り計らってくれるようにとの内容で実行出来たと思われます。しかし箱館製陶器が「箱館焼」であるとしたら、それ自体あまり質が良くなかったように聞いていますので、兵五郎の取引もさほど期待出来なかったでしょう。

第３番目は、慶応４年の「箱館地方及蝦夷地引渡演説書」という文書の記述です。「一、箱館・内間町の福島屋兵五郎に六ヶ場所のご用達を申し付ける。　一、在方救助のため、貸し渡し金がある。これは魚漁に限らず、その他何の商売でもよい。元手金の融通助成のために行うものであって、貸し渡し金には冥加利金を納めなければならない。その際、貸し渡し帳並びに証文類を取り揃えること。もし拝借人が無い場合には、箱館・内間町の杉浦嘉七、有川村の種田徳之丞、箱館の大町荘八、内間町の兵五郎、右四人に預け置くこととする。」

六ヶ場所とは、箱館より東側の子安・戸井・尻岸内・尾札部・茅部・野田追のことです。またこの頃には、公の金銭授受にも携わるようになっていますし、箱館港でも人に知られるような存在になっていたのでしょう。箱館に来て、はや14～15年は経っていました。

安政末年頃の箱館の長者番付表によれば、杉浦嘉七は勿論筆頭の大関でありましたが、東の前頭五枚目に福島屋兵五郎の名も記載されています。嘉七の世話で株を持ち、商売に励みそれなりの蓄財も出来ていた模様です。

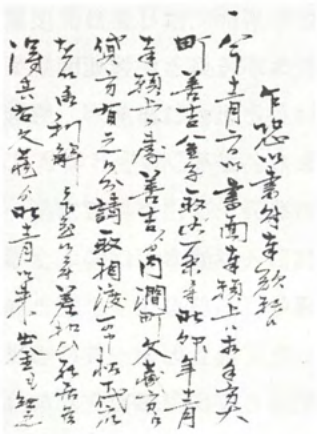
写真－11　安政末年頃の「長者番付表」（写）

(4) 兵五郎の訴訟

『北海道所蔵公文書目録三』に含まれる「大町善吉へ約定の昆布渡し済みのところ代金不払いに付、支払い仰せ付け方願い出の件（明治元年12月・訴人から名主・町代を経由して奉行所に願い出）」という文書があります。これは、札幌道庁隣の文書館で、写真撮影で手に入れました。

訴状の内容は以下のとおりです。

「昨年（慶応３年）９月、大町善吉と昆布買いの契約をし納品したが、代金1，198両の支払いが３日ほど待ってくれというので待ったが、その後も約束を守らず、催促すると、異国人に売ったので代金を受け取り次第



写真－12　大町善吉への訴状（部分）

すぐ支払うというので待っていたが、善吉はすでに異国人より受取っていて、言語道断の物言いです。荷主への期限もあり、荷主の船はお役所の船で、特に「秋味下り」とのことなので、兵五郎が全額立て替えて支払いました。善吉には度々掛合っても不法なことばかり言いつのるだけなので、昨年12月中、市中御掛様迄お願いしましたが、それでも埒があかず、当７月に又書面を持ってお願いし、本人に掛合ったところ、代金は支払うといいながら、未だに支払われず、困惑しております。その後は、兵五郎方の災難続きの様子を累々と申し立てていて、重ねがさねの事で誠に申し訳ありませんが、格別の御憐愍を以て相手方大町善吉を呼出し、金子の支払方を仰せ付け下さいます様、幾重にもお願い申上げます。」と懇願しています。

兵五郎は、度重なる火災にあい、被害は休店にまで追い込まれ、善吉との取引は思うにまかせず、いかに苦渋の日々を送っていたかが分ります。安政年間の「長者番付表」に載った兵五郎も、今や奈落の底近くに沈んでいったようです。この時期、兵五郎は大いに焦っていたと思われます。それはこの事件が、明治三年五月にはじまる「破産」に追い込まれた事件の遠因になったと考えられるからです。

善吉方より支払方法が呈示され「沽券や渡手形残金は明治二年よりの支払」と頼まれ、よんどころ無く承知したようですが、果して申し出の通り善吉が実行し全額回収出来たのかどうか、何とも不運なことです。

(5) 瑞龍丸難破事件

明治３年５月、長崎銅座築地・山田屋荘次郎代人・徳次なるものが兵五郎の元へやって来ました。山田屋荘次郎とは前年からの客筋で、長崎では有名な商家です。徳次が長崎から運んできた支那・和蘭陀両国の薬品その他を周旋し、荷物の売買の件は徳次に任せて世話料を受取っていました。その後も入れ替り立ち替り帆前船がやって来ましたが、同３年10月に帆前船「瑞龍丸」が箱館を出航するとき、中荷金が不足して荷物を充分積み込めず、不足分を心配してくれと客筋に頼まれました。兵五郎は手元不如意だったため借金をして品物を用意し、また三代目嘉七に頼み込んで十勝昆布五百石余りを融通してもらい、代金は11月限りと約束して、10月23日に出帆しました。

しかしその後天候は悪化し、航行が遅れて約定通りの仕払いはなされず、「瑞龍丸」が難破したこともあって、ことごとく行違ってしまいました。そのうち借金の返済期日も迫り、ついに窮余の一策で凌いでしまいました。不幸な金策もあって精魂は尽き果て、外国人がらみの取引も関係してついに裁判沙汰にまで発展してしまいました。

長崎から荘次郎の代人を呼び寄せましたが、徳次は函館で病死したため長崎からの代人も帰国してしまい、すべての負債が兵五郎に被さり、結局三代目・杉浦嘉七が清算して事を収めてくれたのです。一阡八百九拾両の元金に始まり、壱萬両の返金になっていました。『北海道所蔵公文書』の中には徳次が書いた五千百六拾九両三歩の借用書一札と千八百九拾両の借用書一札も含まれていました。

(6) 度重なる火災と ブレキストン・マール社の申立書

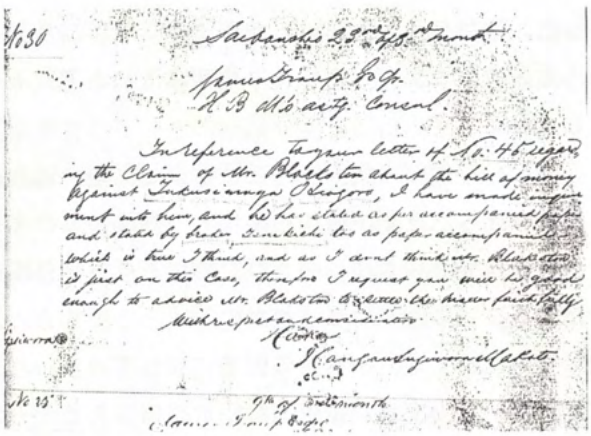
慶応２年（1866）９月12日に、内間町丁代・備前屋吉郎兵衛方より出火して、大火であったといわれています。安政７年の人別調書には、吉郎兵衛は内間町３丁目に住んでおり、七軒隣には絵馬師・兵五郎店輔作が住んでいました。輔作とは後の「平沢屏山」です。２丁目には杉浦嘉七が、１丁目には根室の請負人等がおり、当時の内間町には名だたる人達が住んでいたよう

です。

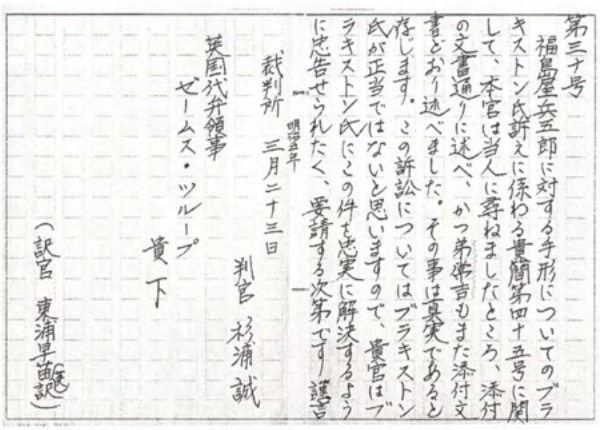
翌々年の明治元（1868）年の春に大町から出火し、この時には兵五郎は蔵を焼き、手持ちの商品を残らず焼失し、先の訴状の中でも店は休業状態になったと訴えておりました。

明治５年に、英国のブレキストン・マール社より「福島屋兵五郎に関わる再考方の書状」が出されています。英国代弁領事から開拓使函館支庁の杉浦誠判官宛で、その文中に「第30号、貴下ノ書翰ニ報告ス」の文面があり、**写真－13** がその書翰№30の写（控）で、元町のレンガ倉庫の中から発見された英文です。

写真－14 はその訳文で、井上先生のご指導で解読された文面です。兵五郎の資金繰りが不調で、トラブル発生の最中でした。杉浦判官から「本人に尋ねたところ、添付書のとおりでありそのことは真実である。この訴訟については、ブレキストン氏が正当ではないと思う。」と回答しています。



写真－13　日本側の回答書（英文・写）



第三十号

福島屋兵五郎に対する手形についてのブラキストン氏訴えに係わる貴簡第四十五号に関して、本官は当人に尋ねましたところ、添付の文書通りに述べ、かつ弟弟吉もまた添付文書どおり述べました。その事は真実であると存じます。この訴訟についてはブラキストン氏が正当ではないと思いますので、貴官はブラキストン氏にこの件を忠実に解決するように忠告せられたく、要請する次第です。謹言

一　明治五年三月二十三日

裁判所　判官　杉浦誠

英国代弁領事
ゼームス・ツループ　貴下

（訳官　東浦早苗訳）

写真－14　日本側の回答書（井上先生の訳文）

大町善吉の昆布事件にはじまり、度重なる火災の被害に打のめされながら何とか起死回生策を取って頑張ったのではないかと思われますが、残念ながらそれは果せませんでした。結局、明治６年２月に「身代限り」（破産宣告）の処分を受けたのです。

異母兄の二代目・杉浦嘉七は慶応２年に引退して家督を三代目に譲り、名前を祖父、父と同じ「忠三郎」に改めていました。兵五郎の一件の頃は病床にあったようですが、明治６年に61歳で亡くなりました。本人の希望で高龍寺の墓には入らず、住吉町の墓地に神葬で葬られたといいます。横浜の子孫の方がお墓を捜されましたが、分らなかったそうです。

５．その後の兵五郎

兵五郎は破産後、大町１丁目より西川町へ移転した様です。『函館市史・通説編・第二巻』の明治６年１月９日の項に「青森県用達・小田藤吉、第三ノ五小区西川町、井原兵五郎方寄留」の記載がありました。

明治２年、長男利三郎には長女フテが生れています。利三郎の妻即ち、私の祖母の母親のことですが名前を「やす」といいます。父は松前藩士・酒井せん十郎といい松前の藩校に関わりのある人で、その娘であったと聞いています。時代劇の中で奥方が御屋敷の中を着物の裾を引いて歩く姿を見ると、自分の母もその様だったと、祖母は云っていました。

明治13年７月19日から24日にかけて函館市では戸長選挙が行なわれていました。『函館市史・通史編・第二巻』に当時の函館新聞に「戸長選挙会一覧表」が載っていました。この記事の五組（地蔵町～大森町）に井原兵五郎の名がありました。戸長選挙に立候補したとはちょっと驚きです。破産宣告から立直ったのだと思います。五組の選挙結果では、６人中第５位で、兵五郎の票は決して多くはありませんでしたが、それでも支持してくれる人も居りましたようで、まずまずの暮らし振りのようでした。

同じ頃の明治13年９月３日付けの「函館新聞」に広告を出していました。

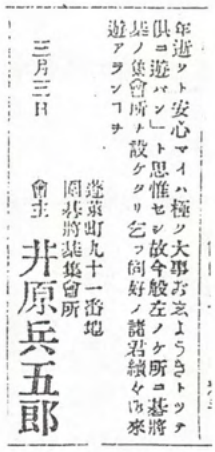
「知己の諸君、ご機嫌よろしく遊ばされて御座、恐悦至極に存じ奉り候。従って私、生計補助の為妻井原千

代儀、旅人宿を致し候に付、一層の御丁寧なお取り扱いを申し候間、これまでの御贔屓を以て、四方の諸君、御来宿下され候様、ひとえに願い奉り候。以上　井原兵五郎・井原千代」

とあります。井原千代は再婚相手です、長男利三郎の母親ではありません。

明治16年に祖母ムメが生れました。利三郎の三女となります。明治19年には長男広次生まれました。

また、明治22年３月８日付け「函館新聞」に次のような広告が出ていました。


年逝ケト安心マイハ極ク大事ナヨウキトツタ
俱ニ遊バント思惟セン故今般左ノ箇所ニ碁將
棋ノ集會所ヲ設ケタリ乞フ同好ノ諸君續々御來
遊アランコヲ
三月三日
遊廓町九十一番地
碁將棋集會所
會主　井原兵五郎

写真－15 「函館新聞」の広告（明22.3.8付）

「年逝くと安心まいは極く大事、碁・将棋取って俱に遊ばんと思惟せん故、今般左の箇所に碁・将棋の集会所を設けたり。乞う同好の諸君、続々御来遊あらんことを。　会主・井原兵五郎」

叔父の手元にあったたった一枚の兵五郎の写真を思い出します。柔和な顔に顎ひげが長く良く似合っていました。

兵五郎が息子利三郎と一緒に暮したかどうかは分りませんが、利三郎妻やすは明治28年１月25日に40歳で歿し、兵五郎は同34年５月27日80歳で歿しています。利三郎は同年９月７日52歳で亡くなりました。除籍簿を見ると祖母ムメは、兵五郎の亡くなる少し前の同34年２月に嫁入りしています。

福島屋からは、兵五郎在世中には扶持が届けられていたと、祖母から聞いていました。それは明治７年の開拓使公文録中に「福島屋の福島屋たるは全て忠三郎入夫以来函館一番の豪商と相成り云々…」とあります。三代目嘉七が永くその思いを持ち続けたゆえんと考えております。

おわりに

東別院船見支院に、井原屋と刻まれた墓があります。駒井の墓の近くで、何年か前に偶然見つけたのです。子供の頃、お盆には祖母を先頭に叔母や従姉たちと、一団体で親戚のお墓巡りをしたものでした。支院の御廟にもお参りしたのに、祖母は何も言いませんでしたから、このお墓のことは知りませんでした。

石に刻まれた命日も二代目・忠三郎と同じで、まさにそのお墓なのです。忠三郎の27回忌に二代目・杉浦嘉七が建てたと思います。支院の古いお墓は弥生小学校の場所にあった墓地から移されたもので、お骨は入ってないといわれています。今は見つけた私がお守りをするような格好です。

写真－16　函館にある二代目・井原忠三郎の墓

永い間着かず離れずで、ルーツに関心を持って来ましたが、楽しい情報や得難い人に会えたりで本当に良かったと思っております。

杉浦家の末裔の方と一緒に千代様のお話を御聞きしたり、仁木町に伝わる毛利家の系図のコピーを頂いたり、大学教授とルーツについてお話をすることが出来たり、古文書の解説に一喜一憂したり、平凡な暮しの中では考えられない様々な体験が出来ました。元気の源になったのだと思います。これからもまだ何か出てくるのではないかと、期待しているところです。

（おわり）

後記：今年度の主な事業

①市内の博物館等施設めぐり

・縄文文化交流センター・史跡大船遺跡・戸井郷土資料館・史跡志苔館等

②北海道立函館美術館「夷酋列像」特別展示の見学

③市立函館博物館企画展「写された幕末・明治の函館」の見学

④北東北博物館施設等見学の旅

・八戸市博物館・史跡根城の広場・是川縄文館・二戸市歴史民俗資料館

・田中館愛橘記念科学館・福田繁雄デザイン館・康楽館・大館郷土博物館

・青森県立郷土館・三内丸山遺跡等

⑤会員発表会　駒井麗子氏が「私のルーツ探訪記」をテーマに発表されました。

発表内容を今号に掲載しております。

それぞれの事業は好評裡に終えることができました。会員皆様のご指導とご協力に感謝申し上げます。

現在、次の企業・団体から協賛を頂いております。改めて御礼申し上げます。

・(株)エスイーシー　・金森商船(株)　・(株)建築企画山内事務所　・(株)五島軒
・五稜郭タワー(株)　・(株)佐藤公郎建築設計事務所　・(有)三和印刷
・(株)千秋庵総本家　・(財)相馬報恩会　・名美興業(株)　・(有)ヤマイ井上米穀店

(敬称略・50音順)

平成25年度　市立函館博物館　企画展日程

1.「箱館商人の人生模様」

①開 催 日 時；4月23日（火）～5月31日（金）9：00～16：30

②解説セミナー；4月27日（土）13：30～15：00（電話受付が必要）

5月11日（土）13：30～15：00（電話受付が必要）

2.「新島襄と幕末の箱館」

①開 催 日 時；6月14日（金）～9月1日（日）9：00～16：30

②解説セミナー；6月15日（土）10：00～11：30（電話受付が必要）

6月15日（土）13：30～15：00（電話受付が必要）

3.「新収蔵資料展」

①開 催 日 時；9月21日（土）～11月3日（日）9：00～16：30（11月以降は16：00まで）

②解説セミナー；9月21日（土）13：30～15：00（電話受付が必要）

※博物館ではこの他にも、年間を通して各種講座を実施しています。詳しい内容は、博物館にお尋ねください。
（博物館 Tel 23－5480へ）

市立函館博物館友の会会報　No.61

発行所　市立函館博物館友の会

印刷所　(有)三和印刷

電話 0138(45)0845

平成25年3月31日　発行

函館市末広町19－15　郵便番号040-0053

市立函館博物館郷土資料館内　電話0138(23)3095

振替口座　函館02650－0－2216